

氏 名 福 島 雅 儀

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大甲第626号

学位授与の日付 平成14年9月30日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 古代国家形成における陸奥南部の考古学研究

論 文 審 査 委 員 主 査 教授 阿部 義平  
教授 白石 太一郎  
教授 宇野 隆夫  
教授 春成 秀樹  
教授 鈴木 靖民 (国学院大学)

## 論文内容の要旨

本論文が対象とする古代国家形成期は、初期ヤマト政権が成立する3世紀後半から律令国家が成立する8世紀までの期間である。この論文は、この期間に陸奥南部が国家を構成する地方に編成されるまでの歴史的状況を解明することを目的としている。これまで陸奥南部は、陸奥北部や関東地域と比べると特色のない地域とされ、十分な研究はなされていなかった。ところが、この地域に遺された各種遺物や、古墳や集落遺跡、生産遺跡、地方官衙遺跡などをみると、中央勢力と地方の関係を考える上では、重要な地域といえることができる。古代国家形成期の遺跡・遺物には、陸奥南部の社会が中央勢力や周辺地域との関わりの中で歩んできた歴史的特性が反映されているはずである。そこで考古学的手法から、表題について遺跡・遺物の分析を行った。

考古資料の分析では、これまで筆者が関わった発掘調査成果や現地調査を実施した資料を中心に、つぎの7項目を選定した。①前期古墳の出現。②集落の構造の変化。③5世紀から8世紀までの古墳の変化と特徴。④鉄刀の編年と装飾大刀の意義。⑤須恵器生産の革新と編年。⑥鉄生産の導入と展開。⑦地方行政施設の出現過程である。

このうち②では、気候環境と生活の関わりに注目して、住居や貯蔵施設の復元を行うことから、集落の実態を復元的に分析した。この結果、5・6世紀の畑作主体の小集落から、7世紀に河川周辺で水稲農業が大規模に進展し、さらには8世紀以降は、丘陵山間部まで開発が進められた様子が明らかになった。また集落内部の階層分化が、8世紀以降に急速に進行したことも示した。

①・③では、古墳と副葬品の在り方から、首長層の社会的性格や地域社会の政治的動向を分析した。これにより、地域集団が政治的に編成され、在地の首長が地方官僚にまで変化する過程を明らかにした。

④では、これまで重視されなかった鉄刀の構造変化を明らかにして、装飾的要素で作られた鉄刀編年の不備を正した。さらに7世紀代の装飾大刀が中央勢力により、軍事力の編成を目的として、畿内政権により配布されたという結果を得た。

⑤の善光寺窯跡編年は、陸奥南部における7世紀代の年代基準である。窯跡を構成する土層のまとまりから土器型式を設定した。⑥では、これまでの調査成果の再検討を行うことから、鉄生産遺跡についての理解を改めた。⑦では、地方行政施設や寺院に使用された軒丸瓦の年代を追うことにより、これらが陸奥南部で出現する過程を明らかにした。さらに地方行政施設が成立することで変化した各種の生産活動や物資の流通網についても、いわき市根岸遺跡周辺を例に分析を加えた。

以上の結果から、陸奥南部の古代国家形成過程は、5世紀から7世紀代の在り方に、地域の特性があることが明らかになった。5・6世紀代の陸奥南部は、気候の寒冷化の影響を受けて畑作地帯に変化した。集落は丘陵地帯に点在して造られ、生産性も低く、人口も希薄で、有力首長が存在しないことから、大きな地域勢力が形成されない状況である。ほかの地域と比べると階層差の小さな社会である。陸奥南部は、古代国家形成過程における継続的な発展が阻害された点で、関東地方以西の地域とは異なる経過を歩むことになった。

7世紀になると、気候は温暖に向かったと考えられている。これを受けて丘陵地帯の小集落が解体して、河川周辺に大規模集落が形成される。また周辺では、水田の開発が進め

られた。水田農業では、水路の掘削や耕地の維持、各種農作業の協業のために地域集団の形成が必要になる。群集墳の出現は、地域集団の政治的まとまりが存在していたことを示している。また中小前方後円墳の造営や舟田中道遺跡にみる豪族居館の復活は、この時期における首長層の成長を示している。陸奥南部の首長層は、関東地方の有力首長層と結び付いて、地域支配の中核となる。こうして陸奥南部では、人々が編成され、各種開発・生産活動を実施することが可能になった。さらに、窯業生産や鉄生産の先進的な生産技術が導入された。なかでも鉄生産の開始は、陸奥南部地域が十分な経済力を付け、各種開発を可能にする基盤として重要である。

さらに7世紀後半になると、中央から地方への政治的働きかけと支配の強化が図られる。陸奥南部では、在地の首長層から地方行政を担当する地方官僚が選出された。合わせて、これを支える属僚に類する人々も組織された。首長の古墳に白河市谷地久保古墳などの畿内系横口式石槨が導入されること、群集墳の単葬墓化から、首長層の官人化と属僚層の編成が推測できる。これとともに寺院が建設された。寺院の創建は、新しい政治制度を思想的に支える宗教の導入を示している。

こうして、8世紀初頭までに律令制度による統治が開始され、陸奥南部では郡衙が相次いで創設される。各郡の経済力的な発展が図られ、政治的な統合が指向された。さらに8世紀前半の一時期には、陸奥南部が石城国・石背国として分立するまでに成長を遂げる。7世紀後半の陸奥南部は、古代国家の成立にともなう地方支配の改革が、強力に実施された地域ということが出来る。

古代国家に編成された陸奥南部の実質的な支配者は、地方行政を現地で運用する郡司やその属僚層に属する人々である。一方、中央政権の側では、領域の北辺を確保するために、陸奥北部を支える地域として、陸奥南部をあわせて、広大な陸奥国を編成することが可能になった。これによって古代国家の北辺支配をより確固なものにすることが図られた。以上のように本研究では、陸奥南部が古代国家を構成するひとつの地方として編成される過程の一端を明らかにした。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は、考古学の方法によって、現在の福島県域を中心とする陸奥南部の、4世紀から8世紀初頭におよぶ古代国家形成期の歴史的展開とその地域的特性を明らかにしようとしたものである。本人が調査を担当した遺跡を含めて、集落や古墳、さらに生産遺跡などの発掘調査の成果や、注目すべき出土品の精緻な研究をもとに、在地社会の歴史的動態を詳細に分析し、その上で中央政権との関わりを考察している。福島県域は、古墳が継続的に展開した北限で、律令期には律令国家北端の陸奥国に組み込まれた。従来、この時期の陸奥南部については、関東地方の縁辺といった位置付けがなされてきたが、実際には大きく異なる歴史的展開が認められ、さらに陸奥国の南部として重要な役割を担わされたことを明確に論じている。この地域では、気候の寒冷化により5世紀には大型古墳の造営の衰退がみられるが、これには地域社会の衰退という大きな歴史的現象が隠されているとする。そして6世紀後半になって古墳の造営が復活し、急速に社会が安定化に向かうことを集落展開の動向や群集墳のあり方などからあと付け、さらに古代国家に組み込まれる過程を分析するきわめて意欲的な論文である。

各章ごとの注目点をあげると、第1章「陸奥南部における古代国家形成の開始」では、古墳時代前期の4世紀に大型古墳や豪族居館が地域ごとにみられ、会津地方では地域での首長層の階層的構成が古墳から把握される。土器の移動から北陸地方を含めた人々の移動期でもあるが、古墳の被葬者は、その諸特性から在地の発展の内で把握されるとみる。中通りや浜通りでも移住や征服による社会変動とはみられないという重要な主張をしている。

第2章「阿武隈川上流域の古代集落」では、5・6世紀になると畑作中心の小集落が展開し、そこでは1戸の単婚家族程度の生活と、それが少数組み合わさった小経営体＝複合世帯が単位として抽出され、移動がくりかえされる特色を導き出す。豪族居館と目される遺構も、小集落結合の共同祭祀的役割を荷ったとする。7世紀には、阿武隈川沿いなどに集落が集中する現象が起こり、永続性も生じ、大きな複合世帯も見られるに至り、豪族居館も復活する。8世紀前半には集落での階層分化が明確化し、一方で広く散居集落が展開して再開が進行する興味深い事実を明らかにする。

第3章「古墳からみた陸奥南部の社会」では、5・6世紀の古墳を分析する。5世紀には古墳も少なくなり、分布に偏りが生じ、大型古墳がみられなくなる。この間、5世紀後半には北方の交易ルートなどに拠点的な小型の前方後円墳がみられたが、全体的な古墳の衰退が指摘される。6世紀にも衰退は続くが、6世紀後半になると、地域ごとに前方後円墳が復活し、横穴式石室も導入され、有力首長層の成長が認められる。7世紀に入る頃から南方や中央の動向に対応する切石積横穴式石室や横口式石槨が次々に展開し、また横穴群が地域ごとに広くみられ、装飾横穴もみられる。大きな複合世帯などの有力農民層が動員されて、武装していた姿が窺われるとまとめている。

第4章「7世紀鉄刀の編年と装飾鉄刀の社会的意義」では、鉄刀装具の編年と7世紀の装飾鉄刀が中央から下賜されたことを述べている。戊辰年の紀年銘のある箕谷2号墳の鉄刀についても、これを7世紀後半の668年に求める新見解を提示した。

第5章「須恵器編年と生産の革新」では、浜通り北方に中央からの技術移転を受けて、7世紀以降須恵器と瓦の生産が集中的に展開したことを明らかにする。独自の須恵器の型

式、細分と年代比定を提示した。

第6章「鉄生産の開始と展開」では、7世紀中葉から浜通り北方に、先進的な鉄生産が導入されたことを論じる。その実態や展開を分析し、その生産品が陸奥北部の対蝦夷対策だけでなく、主に国内開発等にまわされたと主張する。

第7章「地方行政施設の出現」では、律令国家展開の諸段階がこの地域にも反映し、特に7世紀中葉の寺院の展開、7世紀後葉には官衙展開が典型的に把握され、中央の強い関心が伺われるとする。

終章では、「古代国家形成期の陸奥南部」を4段階に区分して把握する見解がまとめられている。

本論文は、一定地域における集落、古墳、生産遺跡、さらに初期寺院や官衙などの実態を総合的に関連づけた独自の研究を基盤とし、社会の諸層の変化にも目を配ったもので、ミクロな考古学的分析を地域の歴史の大局的把握につなげ、倭国から日本国に移る時期の陸奥南部の歴史的役割を明確にしたものとして、高く評価できる内容をもっている。フロンティアとしての陸奥国を内部からささえるという陸奥南部の果たした歴史的役割を明確にし、陸奥国内からの石城・石背二国の分離と再統合の意味についても視点が及んでいる。今後の考古学の進展にともなって当然修正は必要となろうが、大筋としては動かない陸奥南部の歴史的動態とその特性が把握されたものとみなしうる。また、古墳時代から律令時代に至る長期の、しかも大きな歴史の転換期を考古学的方法によって意欲的に追求し、これまで必ずしも明確でなかったこの時期の陸奥南部の歴史的な性格を明らかにした意義は大きい。在地社会の動態と中央政権との関わりについての考古学的研究の総合化の一つの方向を示したものといえる。

なお、本論には立論上、さらに資料を踏まえた実証的検討を必要とする事項が少なからず見受けられた。たとえば古墳時代における気候の寒冷化の実態や終末期の横口式石槨の系統の問題などもその例である。またこの時期の陸奥南部の歴史的な位置をより鮮明にするには、隣接する陸奥北部、北陸、関東などの諸地域のあり方との比較検討が欠かせないが、その点の検討も必ずしも充分とはいえず、今後のさらなる研鑽が期待される。

以上、本論文は、残された問題も少なくないものの、古墳時代から律令国家形成期の陸奥南部に対する従来の歴史的な位置付けを大きく変更するなど、高く評価される内容を持っており、学位を授与するに値するものと認定した。